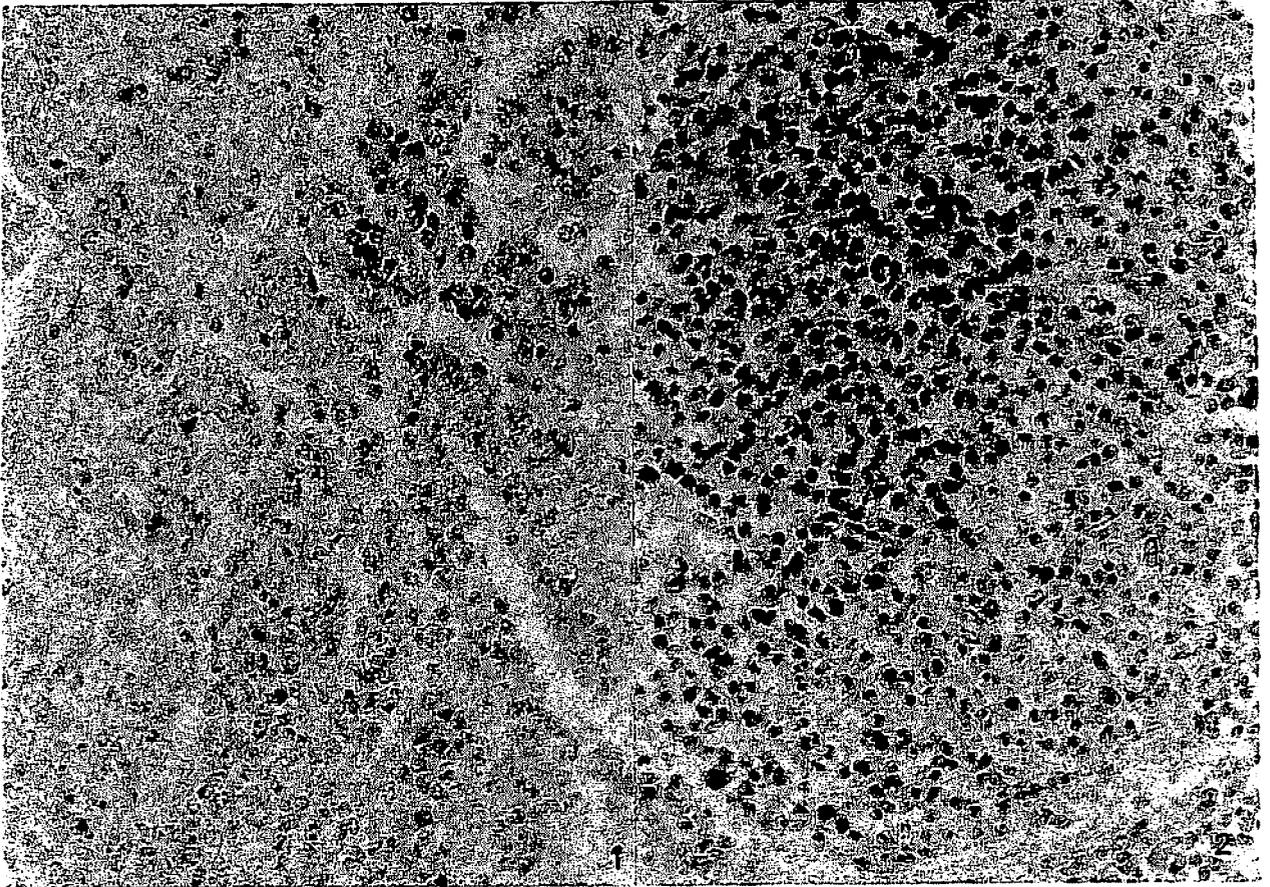


犬の肺の腫瘍

鹿児島大学獣医学科家畜病理学教室出題 第18回獣医病理学研修会標本No.282



動物：犬，ドーベルマン種，♀，7才。

臨床的事項：約2週間前より急に食欲・元気消失，消瘦著明となり，脱毛と血尿を見る。初診時体温39℃，脈拍100，呼吸速迫，肺に捻髪音が聴かれ，レントゲンにより肺炎様の陰影が見られた。直ちに入院させ治療するも症状の改善が見られないため，予後不良と判断し，1977年9月30日安楽死させた。

剖検所見：体重20.4kg，栄養不良，可視粘膜蒼白，気管支・縦隔膜リンパ節は腫大し，肺には全葉にわたって小豆大～蚕豆大の灰白色結節が無数に密在し，その中に鳩卵大～手拳大におよぶ腫瘍が散在する。これらの断面は灰白色均質で出血や黄色色素の沈着があり，右心室より肺動脈にかけて約20個体の犬糸状虫の寄生を認めた。腹水は増量し，肝は黄褐色硬固で，formalin固定による緑色化が見られた。そのほか膀胱粘膜面に小指頭大の乳頭状新生物が認められた。

病理組織所見：肺全面にわたって密在する小形の腫瘍の組織は，核仁は明瞭でchromatinの乏しい比較的大形の核を持ち，原形質が豊富で類円形を呈する大形の腫瘍細胞が主体をなす（図1，HE，X330）。塊状をなす腫瘍細胞の間には紡錘形の間質細胞が網目状に連らなって，いわゆる蜂窩状構造をなす。これらの網状構造は鍍銀染色，PAS染色標本で明瞭に認められた。腫瘍細胞中にはPASおよびmucicarmine陽性顆粒を含まず，屢々有

糸分裂像が認められた。一方大形の腫瘍は肥厚した肋膜に被われ，その辺縁部組織は同様の大型腫瘍細胞が主体をなす。これらの腫瘍中心部に大きな壊死巣があり，その周縁組織には原形質が乏しく，核が濃染して，一見リンパ球様を呈する小形の円形腫瘍細胞が主体をなす（図2，HE，X330）。これらの内外両組織の移行部分には類円形から多角形を呈する大形の腫瘍細胞と小形の腫瘍細胞の混在が認められた。以上の他に，所により比較的大形で核と原形質が共に淡染する立方上皮様の細胞が肺泡状や腺管状に配列する部分が見られ，屢々その内部に円形の腫瘍細胞が見られた。また一部には気管支粘膜上皮の多層化やその下に円形で核の濃染する基底細胞の増殖を示す，いわゆるBronchopathieの像が見られた。腫瘍組織中には細胞外にeosinに好染する滴状物が見られ，これらはPAS陽性でGiemsaやazan染色により青染するがmethylene blueに染色されなかった。腫瘍組織に隣接してBerlin blue反応陽性顆粒を含む喰細胞が見られた。また膀胱に見られた腫瘍は乳頭腫の所見を示した。

組織学的診断：多くの肺癌は多分化能を有する基底細胞（一名予備細胞）に由来すると考えられており，細胞形態からの発生母地の決定は困難である。従って本例の肺癌を組織像より分類する時，細胞形態表現として大および小細胞型の単純癌（未分化癌）と診断されよう。